

## 鯖大師伝説の変容

関根 綾子

はじめに

鯖大師伝説は高僧伝説の一つである。旅僧が塩鯖の荷を積んだ馬子に鯖を乞うが、馬子は拒否する。僧が呪歌を唱えると馬の腹が病んでしまう。馬子が鯖を渡すと僧は再び呪歌を唱え、馬は元通りになるとというのが梗概である。この伝説は徳島県海部郡海陽町にある、四国霊場番外札所の鯖大師本坊（八坂寺）の縁起としても知られている。

柳田国男が、「海岸の住民が魚を捕り、内陸と交易をする際に境の神に魚をお供えした風習が生成の基盤にあるのではないか」と解釈して以降、<sup>①</sup> 阪口保氏、<sup>②</sup> 五来重氏<sup>③</sup>なども、伝説の発生を主な問題にしてきた。

花部英雄氏は鯖大師の呪歌が室町時代の文献に見られ、現在でも呪歌が伝説とは独立して、馬の腹痛を治す唱え言として各地で伝承されていることから、「馬の腹病みを治す呪歌が最初にあり、後に伝説が生成した」と論じている。<sup>④</sup> 伝承者の点は再考

すべきであるが、呪歌が先にあり、伝説が付随したという生成説は筆者も同感する。

本稿で問題にしたいのは、江戸時代では鯖大師伝説の僧名は行基であったが、現在では弘法大師となっているという伝承の相違である。

この点は柳田国男も疑問に思っただけでなく、論文の冒頭で「弘法大師にも（行基と―論者注）同じ奇蹟は折々あったのだが、さすがにその信仰の中心地（四国霊場のこと―論者注）では、これはややありがた迷惑であったものか、ここばかりはこれを本職の行基に委ねたままになっている」と鯖大師伝説が弘法大師信仰に不都合だったため、行基のままであったと述べている。

行基から弘法大師に変化したことについて鈴木棠三氏は、大師信仰が普及し、札所巡礼が組織化される反面で、勸進聖の社会的存在意義が失われ、むしろ乞食にまで零落して行ったため、それまでの行基を弘法大師にすり変えることが多くなっており、それが考えられる。<sup>⑤</sup>

と、弘法大師へと取り込まれていったのは、大師信仰の普及が原因ではなかったかと考察している。

また行基と弘法大師伝承のつながりを調べた米山孝子氏は、九世紀末に作られた『贈大僧正空海和上伝記』を考察し、

修行によって体得した聖人的要素の神通力とか、結果的には大僧正位を得たこと等の共通する要素を強調する上で、行基の後継を暗示する説話が必要であった。

と弘法大師が行基の後継者であるという説話を説明する。そして鯖大師が行基から弘法へと変容した理由としては、「真言宗の勢力拡大をはかる祖師伝説化と教界の布教活動によるところが大きいだろう」と述べている。<sup>(6)</sup>

鈴木棠三氏、米山孝子氏が論じるように、行基から弘法大師へと変容した理由としては、大師信仰や真言宗の布教が大きく関与していると思われる。

ではいつ頃変容したのだろうか。そして鯖大師伝説が、行基から弘法大師へ変容する要因は、大師信仰の勢力拡大だけだろうか。

本稿では鯖大師伝説の変容について考察していきたい。

## 一 全国の鯖大師伝説

論末に鯖大師像を祀る寺の一覧を挙げた。そこからわかるように、鯖大師像は北海道から長崎まで、主に太平洋側の土地でお祀りされている。しかし伝説は伝承地が限られている。

表一 徳島県以外での鯖大師伝説

伝承地	調査年・ 出版年	僧名	場所	歌	備考	出典
高知県 須崎市 安和	⑧M24年生	弘法大師	鯖大師 の坂	○	鯖を放生・鯖 の背をはがす 理由	A
高知県 土佐市芝	⑧M32年生	遍路	久礼の 焼坂	○		A
鳥取県 西伯郡 中山町	⑧T13年	れんげく さん (冠)	峠	×	刺し鯖	B
広島県 豊田郡 大崎南村	⑧S11年 S14年	行基	大坂の 八坂峠	○		C
広島県	⑧S48年	御大師	長崎の 浜辺	×	魚が腐る・因 島の鯖大師の 由来	D
宮城県 気仙沼市	⑧M41年生	弘法大師	坂	○	笹で馬の腹を さする	E
宮城県 石巻市	⑧T9年生	六部	四国	○	境の鯖大師	E
青森県 三戸郡 五戸町	⑧S5年、 S10年	弘法大師	北の国	○		F
青森県 西津軽郡 車力村	⑧M38年生	弘法大師		○	手拭いや桃の 枝で馬の腹を さする	G

伝説が確認できるのは、徳島県と、高知県、鳥取県、広島県、宮城県、青森県である。

徳島県の伝説は後で検討を加えることにして、ここでは他の地域で伝承されている鯖大師伝説の特色を考察していく。

僧名を見ると、弘法大師が多い。行基であるのは、広島県豊田郡大崎南村（現・大崎上島町）のみである。この話の語り手は、呪歌は明確に覚えていたが、伝説はうる覚えであった可能性がある。行基が鯖を持つている小僧と会うのは大坂の八坂峠である。歌は「大坂や八坂峠越え鯖一つ、行基に呉れで牛の腹病む（牛の腹止む）」と馬ではなく牛が腹痛になる。題は「狂歌咄」注では「此の外発句も併せて、狂咄十一あり」と書いてある。題をつけたのが、話者か編者かはわからないが、呪歌の「大坂や」から、大坂という地名を引き出したように思われる。

名のない僧の場合もある。高知県土佐市では「その焼坂（高知県中土佐町）で遍路さんに逢うた」と遍路の話になっている。呪歌は「大坂、八坂、坂中鯖一つ。行き来にくれて駒の腹病む（駒の腹止む）」である。「行基（大師）にくれて」となるところが、「行き来にくれて」となり、僧名は出てこない。

鳥取県西伯郡では「れんげくさん」という尼の話になっている。尼はこの事例しかない。「れんげく」とは何かがわからないが、話の末尾で「れんげくしはいつですかねえ、刺し鯖だって言っ  
てねえ塩鯖を食べる日があるですよ仏さんの命日にねえ」と語っている。仏の命日とはお盆のことであろう。刺し鯖は江戸時代、

盆に行われた習俗である。『分類食物習俗語彙（サシサバ）』では、鳥取県西伯郡の事例を引き「盆の十四日にやはり両親の揃っている者は塩鯖二枚を重ねたものを、茄子の葉二枚の上に載せて必ず食べる」と説明している。<sup>7)</sup>「れんげく」とは刺し鯖から連想した名称だと思われる。

高知県須崎市でも鯖の由来が語られている。主人公は弘法大師である。

そして弘法大師が浜へ行って鯖を放いたところが生き返って、ずうーと泳いで行ったと。その証拠に鯖には皮が二枚あるろう。その上の皮は食えん。必ずはがさにヤアならん。それは塩がついちよるケヨ。

と鯖の一番上の皮をはがしてから食べる理由が語られている。高知県や鳥取県では、鯖に関する関心が強かったと思われる。

鯖大師像の由来もある。広島県因島市（現・尾道市）では鯖大師像の由来になっている。因島は、明治四五年に因島四国八十八ヶ所霊場が開設され、大師信仰が厚い地域である。鯖大師像は大正十年に土生村の村井才吉氏が建立した。土生町長崎棧橋に安置されていたが、現在は因島公園に安置され、由来が記された石碑が建てられている。この鯖大師伝説は、他の話とは多少異なる。

いつのことか、暑い夏の日ざかりに、見すばらしく、とほとと、いかにも力なげな旅僧が、長崎の浜辺を通っていると威勢よく魚をかついで来たサカナ屋とばったり出くわした。

腹がすいてろくに歩けない旅僧は、サカナ屋をよびとめ、何  
でもよいから魚を一ぴきわけてくれと頼んだ。サカナ屋はみ  
な腐っているので、捨てにいくところだとウソを言って、ふ  
り向きもしないで去った。そしていつもの得意の家を廻って、  
さて魚を売ろうと荷をおろして見ると、鯖がみな腐ってウジ  
虫までわいていた。

サカナ屋は御大師さまに罰をあてられたのだと、いつまで  
も評判を残したのであった。

魚を運ぶ者が、僧に鯖を渡さないところまでは同じである。  
しかし、呪歌が出てこない。また魚が腐るといふのは因鳥の事  
例にしかない。伝説が伝播した時に変容したのであろう。鯖大  
師像と共に伝説が伝播し、複数の伝説集に記されたのは、この  
一例のみである。

東北地方では呪歌が中心であり、伝説は付随した形で伝承され  
ている。宮城県気仙沼市では、話者の唄に「大坂や坂の真中で鯖  
一匹呉ん馬の腹痛み」の下の句を聞いたが、「他人には聞かせら  
れないという理由で教えてはくれなかった」と呪歌の秘儀性を物  
語るエピソードが記されている。また青森県西津軽郡車力村の話  
の解説では、「弘法様の話は伝説としてではなく、馬の病気を治  
すおまじないとして教えられた」と説明されている。花部英雄氏  
が「呪歌とその作法が、専門の獣医の登場する以前に、馬の治療  
法として現実に広く行なわれていたことを示すものであろう。そ  
してこれが、本来鯖大師の話とは無関係に、単独で用いられてき

たのではなかったか」と述べるように、鯖大師伝説の呪歌は馬の  
腹痛を治す呪歌として、伝説とは独立して伝承されることもある。  
鯖大師伝説は、高知県と鳥取県では鯖にまつわる高僧伝説と  
して、東北では馬の腹痛を治す唱え言に付随した伝説として伝  
承されていることがわかる。

## 二 文献での変容

徳島県の鯖大師伝説に戻りたい。鯖大師の寺は「四国八十八  
か所の番外寺院の一つとして、二十三番の薬王寺（日和佐）と  
二十四番の東寺（室戸）の中間、八坂八浜の難所に位置し：中  
略：地理、交通上からいっても休息の寺として大いに繁盛した」<sup>(9)</sup>  
と、行基庵と呼ばれていた頃から四国霊場とは密接な関係にあっ  
た寺である。では、鯖大師伝説が弘法大師伝説の一つに包括さ  
れたのはいつくらいであろうか。

宮崎忍勝氏は、「明治初年には修験道の廃止令が出された。そ  
のころ八阪浜中の鯖大師の説話も行基菩薩から弘法大師に塗り  
かえられたのではないか」と推測している。<sup>(10)</sup> また、巡礼研究家  
の白木利幸氏は『巡礼・参拝用語辞典』の中で「四国における  
大師一尊化によって、行基から弘法大師に変っていくのだが、  
それは江戸時代中後期のころと思われる」と説明している。<sup>(11)</sup>

明治初年、江戸時代中後期と時代設定しているが、両者とも  
その根拠を明確にはしていない。まずは、鯖大師伝説が記載さ  
れている巡拝記や四国遍路の道中案内記から行基から弘法大師

へと変容したおおよその年代を探ってみる。(なお巡拝記等の改行、句読点は論者が付す。「」内は割注)

表一 四国の鯖大師記載文献

成立年代	作品名	僧名	伝説	歌	寺名
寛永十五年 (一六三八)	空性法親王四国霊場御巡行記	行基	×	○	×
貞享四年 (一六八七)	四国邊路道指南	行基	○	○	×
延享四年 (一七四七)以降	土州淵岳志	行基	○	○	×
寛政十二年 (一八〇〇)写	四国遍礼名所図会	行基	○	○	鯖瀬庵
文化八年 (一八一二)	阿波名所図会	行基	○	○	行基庵
文久元年 (一八六一)	雲錦隨筆	行基	○	○	行基庵
明治十九年 (一八八六)	四国霊験記図会(下)	行基	×	×	行基庵
明治四十一年 (一九〇八)	四国八十八箇所霊場案内記	行基	×	×	鯖大師
明治四十三年 (一九一〇)	四国霊場八十八ヶ所遍路独案内	行基	×	×	鯖の大師堂・鯖大師
大正十二年 (一九三三)	四国霊場案内 附弘法大師御伝記	×	×	×	鯖瀬大師

鯖大師が文献上に登場するのは、『空性法親王四国霊場御巡行記』からである。<sup>(12)</sup>この書は江戸時代初期の寛永十五年(一六三八)に大覚寺の門跡であった空性法親王が四国遍路をした際、同行した賢明が記した巡拝記である。

次は土佐路や。遭坂や、八坂坂中鯖一箇、行基に呉れて駒ぞ腹痛と詠せし茲は所なり。

と歌と伝説の所在地を記している。歌のみであるが、薬王寺を参拝した後、という記述から現在の場所と同じだと思われる。鯖大師の寺(行基庵)は江戸時代初期から呪歌が詠まれた名所であったことがわかる。

それから約五十年後の貞享四年(一六八七)には宥弁真念が『四国邊路道指南』を記す。この書は近代になっても、四国遍路をする際に読みつがれた案内記である。江戸時代の鯖大師伝説を知るため、全文を記しておく。

あふ坂という坂あり。あさ川まで二里、此間八坂之中八はま之中あり。このあふ坂にて、いにしへ行基ほさつ、さばといふうほつけし馬追男とゆきつれ、いかなる方便にや、鯖一つこわせ給しに、彼男いかりのり奉りけれハ、御哥。

あふ坂や八坂之中さばひとつ 行基にくれでこまぞはらやむとつらねたまひにけれハ、たちまちその馬たほれふしぬ。

男おどろき、かきた、人ならぬ御方しらぬは、しづのわざとひれふして、わびたてまつりけれハ、又

あふ坂や八坂之中鯖ひとつ きやうぎにくれて駒ぞはら止

馬とびあがり本のことくなりぬ。菩薩同事の済度よしある事にや、右八坂之中、八はま浜中の次第。

行基は鯖をほしがったが、馬追男が渡さなかつたために呪歌を唱える。馬が倒れたため、馬追男は謝り、行基が再度呪歌を唱えると治つたという、現在と同じ伝説が確認できる。

延享四年（一七四七）以降に成立した『土州淵岳志』では、「四国辺路道シルヘト云書ニ」「高野心念カ作」と『四国邊路道指南』を元に記述したらしき形跡が伺え、伝説は同じである。しかし、八坂々中、土州阿州両国ノ境ニ中山ト云フ所ト云。往昔、行基菩薩四国廻リノ寸

と鯖をほしがった場所は中山、また、行基が四国廻りをしていった時の出来事としている。

ここまでは伝説は記しているが、寺名は出てこない。『徳島県海部郡誌』によると、行基庵（鯖大師の寺）は

大字浅川字中相にある、曹洞宗正福寺の末である。…中略…寺院明細帳に記してある由緒は「当庵の義は行基祖師開基創立にて往古は海郡（マヅ）頼村弘誓寺に之あり所、後享和年中正福寺に改む、其後文政十亥年年再建す」

と、江戸時代後期の享和年中（一八一〇―一八〇三）に鯖大師の寺と同じ浅川にある、正福寺の末庵になる。それまでは小さな庵であったのが、正福寺の末寺に組み込まれ、寺として機能していったのではないか。

寺の縁起として描かれるのは、寛政十二年（一八〇〇）に九

皋主人が写した『四国遍礼名所図会』からである。<sup>16)</sup>

この書は、寛政十二年の三月二十日から五月三日にかけて四国遍路をした巡拝記である。三月二十八日の条には

福良坂、鯖瀬村鯖瀬庵「道の左二有」本尊行基菩薩。此所にて行基菩薩御修行被遊し所

と鯖瀬庵の名称が出てくる。伝説は『四国邊路道指南』、また行基が四国で修行していた点は『土州淵岳志』と同じである。

文化八年（一八一二）の『阿波名所図会』では、寺の縁起である点がより強調されている。<sup>17)</sup>

八坂のうち、福良坂の南の谷に民家あり。鯖施村と名づく。また坂本に一字あり。行基庵と名づく。その来由をとへば、

と、行基庵が出てくる。末尾では

このゆゑに、古跡ありて行基庵と名づく。この地の名を鯖施村といへり。

と地名由来も記している。

行基庵は参拝者が多かつたらしく、文政十年（一八二七）には本堂を再建している。参拝者が集まつた理由としては、地形が影響していた。行基庵のある八坂八浜は、現在では道路が舗装され、難所であった面影は道路から見える海岸線のみである。薬師寺からも車を使うと、一時間程度で着く。しかし、大正十一年に道路が改修されるまでは、親不知子不知のような難所であった。行基庵は四国遍路時の休憩所としての需要もあり、寺には参拝者が多く集まつたのだらう。

文久元年（一八六一）の序がある『雲錦隨筆』では、縁起が作成されていたことと、現在も安置されている鯖大師像についての記述がある。<sup>(18)</sup>

此八坂に行基庵といふあり。此本尊に行基僧止の像を安置す。其影行基旅装にて左の手に数珠を持、右の手に鯖一尾を携へて立給ふ、異容なる像也。…中略…此事世上に隠れなく其徳を感嘆し、終に其地に庵室をいとなみ、御影を摸して本尊とし、今の代までも尊信し遠近より詣人間断なしと聞ゆ。「委しくは本縁起に見へたり、いさ、か爰に採要す」

と、現在と同じく、左手に数珠、右手に鯖を持つ鯖大師像の様子が記されている。そして現在は弘法大師像だとされているが、江戸時代では行基像と伝承されていたことがわかる。

明治に入ると、廃仏毀釈が行われ、四国霊場の寺院でもその影響を受けた。四国遍路の文献を調査した佐藤久光氏は、

明治初期には廃仏毀釈で四国霊場は荒廢と混乱が深刻になる。それを示すように明治初期には出版物は殆ど発行されていない。それが明治十代に入ると案内記が徐々に出始める。しかし、その時期の案内記は江戸時代に作られた版本による簡単な道程に御詠歌を記したものと絵図であった。いわば過去の版本の再板や改訂版が中心であった。

と解説している。<sup>(19)</sup>鯖大師の寺でもその例外ではなく、明治十九年まで記事が見られない。明治十九年の『四国霊験記図会』では、<sup>(20)</sup>八坂八浜の絵図が記され、「行基菩薩の古跡」と註釈されて

いるが、絵図は江戸時代末期の『阿波名所図会』と同じ構図である。

八坂八浜は風光明媚な名所として取り上げられることがあった。明治十七年の『四国八十八ヶ所道中独案内』では「此間八坂八はま<sup>(21)</sup>。明治二五年の『四国霊場記』では「此先八名高き四里の間に飛石はね石ごろく石と云玉て難所なり。此此間八坂坂中八濱はま中と云ふも有り<sup>(22)</sup>」と八坂八浜に関する記述はある。しかし、鯖大師については記されていない。

鯖大師は四国霊場の札所寺院でも番外であり、正式な札所ではないため省略したという理由も考えられるが、鯖大師伝説は弘法大師ではなく、行基の事跡を語る伝説だと考えられていたからではないだろうか。

明治後半になると、四国遍路はこれまでとは様変わりする。信仰心からの徒歩での遍路とともに、観光として電車やバスなどの交通機関を使つての遍路も行われるようになった。明治四一年には、新聞記者が四国霊場を巡るという企画が行われ、その記事が新聞で掲載され<sup>(23)</sup>もした。

観光目的でも四国遍路をするようになり、鯖大師の寺は名所旧跡として取り上げられるようになった。

明治四一年に出版された『四国八十八ヶ所霊場案内記』では「鯖瀬に行基菩薩の旧跡鯖大師あり」と出てくる。<sup>(24)</sup>欄外に「浅川郵便電信局あり」と郵便局の所在などが記され、遍路中に金品や手紙のやりとりをするのに便利な情報が記されている。

また明治四三年発行の『四国霊場八十八ヶ所遍路独案内』でも、二十三番薬王寺の所に「郵便局 日和佐郵便電信局あり 舊跡 鯖大師」とあり、上段の「道しるべ」では「四つ目の小山を踰た鯖瀬の鯖瀬の濱に行基菩薩の旧跡鯖の大師堂あり」と行基でありながら、鯖大師という名称が出てくる<sup>(25)</sup>。

大正にはいると行基の名称は登場しない。大正十二年に発行された『四国霊場案内 附弘法大師御伝記』では、「一里ほどで八坂八濱を過ぎ四ツ目の坂を越へると鯖瀬大師がある」と現在と同じ名称で呼ばれている<sup>(26)</sup>。

先行研究で指摘されてきた通り、鯖大師の寺は、四国遍路が整備されていく中で番外霊場に組み込まれ、行基を祀る寺から大師を祀る寺へと変容したと思われる。案内記から変容した年代を探ると、明治四十年代が変容の過渡期であり、大正になると寺名が鯖瀬大師になり、現在と同じく弘法大師を祀る寺になったということがわかる。

### 三 鯖大師信仰

鯖大師像が安置されている寺院の伝承ではどうであろうか。

論文の末尾に鯖大師がお祀りされている寺の一覧を記した。

理由は複数あるが、便宜上

A 漁業従事者の大漁祈願、海上安全

B 新四国霊場

C 高野山や弘法大師とのつながり

D 四国遍路が契機

E 病氣平癒などの個人が祈願

F 不明

の六つにわけた。

Aは祀られた年代が不明の場合が多い。柳田国男が説くように、鯖大師は海辺の住人達が手向けとして魚をお供えしたのが起源のため、年代が明らかにされなれないと思われる。そして新四国霊場、四国遍路や弘法大師信仰からの影響も強く見られる。

鯖大師がお祀りされた年は、管見によるとBの12番にあげた、愛知県半田市にある円通山金剛寺が明治二五〜三二年と最も早い。この寺は愛知県の知多新四国霊場の近くにある。知多新四国とは、「小豆島八十八ヶ所霊場」「篠栗八十八ヶ所霊場」と並ぶ、日本三大新四国霊場の一つである。弘法大師が弘仁五年に三河から伊勢路に向かう際、聖崎（南知多町大井港）に上陸したという伝承を持ち、今でも多くの信者が参拝している。

金剛寺は日間賀島の吞海院（13番）、南知多町の長山寺（14番）と共に鯖大師像をお祀りし、知多三鯖大師と呼ばれている。金剛寺は現在、無住である。斎場として改装され、寺の面影はないが、戦前にはぎやかであった。明治四三年頃に書かれた『亀崎郷土史料』では、知多新四国の海潮院にお詣りした後、「三体弘法新寺ノ鯖弘法大イニ賑ヘリ」と金剛寺は知多新四国の番外霊場として参拝客で賑わったことが記されている。

長山寺住職の大曾根智道師によると、「現在は車のため通り過



ざることが多いが、昔は歩きか牛車に幌をかけてお詣りをした。近くには知多新四国霊場札所の大宝寺があり、その寺にお詣りするのと合わせて長山寺の鯖大師にもお詣りしたのではないかとのことである。<sup>(29)</sup>

また、日間賀島にある呑海院で配布していた『しまみやげ 新四国鯖大師御縁起 全』では「本院住職江尻慈仙口演」として鯖大師の縁起が記されている。呑海院では信者や日間賀島の観光客に縁起や利益譚を語り広めていたことが伺える。<sup>(30)</sup>

金剛寺は住職がないため、話を聞くことが出来ないが、『平田のお寺』では「明治二十五年辰年五月、亀崎真言宗教会所山の鯖弘法と呼ばれたと<sup>(31)</sup>か」とある。ただ、『半田市誌 宗教編』などでは「当初、当寺は真言宗亀崎真言宗教会所山の鯖弘法と呼ばれていたところ」と年代が削除されている。<sup>(32)</sup>しかし、明治三二年に曹洞宗に改宗されたことは複数の市史類から確認できる。このため明治三十年代には鯖大師像が勧請されたと考えて良いだろう。

明治四十年代になると、寺院側の勧請だけではなく、篤信者が実際に四国遍路し、それが発端となり鯖大師像を安置することも行われるようになった。

D にあげた23番の東京都練馬区の金乗院では、明治四二年に四国遍路をした一同が建立した像がお祀りされている。またEの27番の千葉県我孫子市の円福寺では鮮魚商が発願した像であるが、四国から勧請したとあり、四国巡礼の影響が見られる。

#### 四 海陽町での鯖大師伝説

近代に入ると、鯖大師の寺は弘法大師を祀る寺となり、四国遍路の中に組み込まれていく。しかし、文献や縁起と口頭伝承では齟齬がある。文献等では、弘法大師の伝説であるが、口頭伝承では行基と弘法大師の両方で語られる。(丸数字は論末の表三と対応)

大正二年の『郷土研究』<sup>(1)</sup>では「鯖大師」が報告されている。僧名は行基であり、呪歌も行基である。末尾では

今も猶土地の名を鯖瀬(鯖施)と呼びて、年古びたる行基庵ありと

と江戸時代と同じく、寺の名前を行基庵としている。大正に入っても、土地の人々の意識の中では鯖大師は行基のことであり、寺の名称は行基庵であると思われることがわかる。

寺の縁起でも、鯖大師は弘法大師であるとしつつも、行基の影は消せない。馬子に会う前、弘法大師は夢の中で行基と会う。昭和四六年に先代住職の柳本明善師(一八九三―一九八六)が語った鯖大師伝説<sup>(8)</sup>では、

御大師様が若い頃、まだ空海と申される頃、室戸に業<sup>(マヤ)</sup>にお出かけになる途中のこと。一夜の宿をとりなさるにもその当時には家がなかったのね。ちようどあそこに(お堂の建ってある所と指さして)大きな松があったんじや。お大師様その松

の根本でゴザ敷いて野宿なされた。よくお休みになっていたら、夢の中になお大師様より二・三〇〇年前の行基菩薩という仏さんが、天下ってお出てたんじゃ。あくる朝、目を覚ましてここも仏に縁がある土地だなあ、と思ってお経をあげていた。このように、弘法大師は馬方と出会う前に行基と会う。馬方は鯖をほしがった弘法大師を罵り、立ち去るが、馬が倒れる。馬方は弘法大師に許しを請う。

そこで馬方は鯖を一匹持って行って、

「今、馬をここへ連れて来よつたら急に峠で腹痛を起こして、困っております。早う馬の腹を直してやつて下さい。お加持してやつて下さい。」

お大師様は馬の腹痛を哀れみなされて、

「水を汲んでこい。」

と言って、テツバツという、わんを貸してやった。馬方が水を汲んで来ると、その水にお大師様がお加持なさる。そのお加持した水を馬方はいただいて帰り、馬の口にふくませてやると、馬はその馬でお大師様の御利益をもらつて、もとの体になりちゃんと立ち直つた。(……馬子が出家する……)

そこに小さなお堂を建てて、お大師様を最初にお祭りなされた。お大師様が夢にごらんになった行基菩薩さまをお祭りして、お大師様の残された人助けの方法を人さまに授けて一二〇〇年、こうして今日までまいりました。

と弘法大師の次に行基を祀つたとある。

先代住職の語りでは、鯖大師伝説の呪歌は出てこない。昭和九年に鯖大師の寺を訪れた尾関行應氏<sup>⑦</sup>も縁起は記しているが、呪歌は聞いていない。また寺で配布している『阿波國鯖大師本坊由来図』という大判の刷り物でも、呪歌は縁起の中には登場しない。『由来図』は米山孝子氏が論文の中で紹介しているため、重複は避けるが、中央に弘法大師の座像と「鯖大師御加持御法」として「大坂や／八坂／さか中／鯖ひとつ／大師にくれで／馬の腹痛／くれて／馬のはら止」の呪歌が載せられているものの、絵や詞書の中では、馬の腹痛は加持水により治る。なお、現在寺が配布している縁起<sup>⑨</sup>では、馬の腹痛は加持水で治り、その後には呪歌と呪歌の説明が加わっている。

口頭伝承での鯖大師伝説を見ていこう。

徳島県海部郡海南町（現・海陽町）では、一九七〇年代に二大学が調査に入り、鯖大師伝説を聞き書きしている。

登場人物は行基と弘法大師である。③から⑥が行基と大師、⑦と⑧が行基、⑨から⑭までが弘法大師である。

話者の生年は、明治二十年～四十年代に集中している。行基と弘法大師の違いは、話者の年代の差とは言えない。また話者の住居を地域別に見ると、浅川（⑧と⑫）と大田（④と⑪）では同一の字で、行基と弘法大師の両方が語られている。地域ごとで伝承の相違は見られない。

行基と弘法大師が混同して語られる例から見えていく。

### 【事例A】③

もうそれからもうあんまり古いけ松が、その行基さんというそのお大師さんがいた時からあったもんじゃけに、なんじややっぱり行基さんという人がそこにおつて、馬子が来よつてね。馬子が来よつて馬が腹が痛うなつてしたんや。ところが、その馬子が鯖を持つていたらしいね。

「その鯖くれ」

言うたんや。そしてところが、なんやろ

「お大師のような人には、魚やらやつたらいかんて。やらん」(…馬の腹が痛くなり、馬子は鯖を渡す…)

ほでなにしたら、鯖をもおて、その鯖を、あそこの鯖瀬の川に放りなげたという説があるがね。ほいたらその鯖が泳いでたという。ほいで鯖瀬という名を付けたというんじゃけんど、ほの果たしてどんなであるか私は知らんけどね。ほたらもう馬の腹もやんで、いけるようになったらしいという話があるわね。

「大坂や八坂坂中鯖一つ行基にくれて馬の腹やむ」

行基のことをお大師さんと呼んでいる。古い松とは行基が植え、弘法大師が宿つたとされる松のことである。縁起では、弘法大師がこの松の下で行基の夢告を受けているが、この話では行基がいた時代からあったとのみ語っている。また鯖を放生したため、鯖瀬と名を付けたという地名由来も語られている。

#### 【事例B】④

ほたところ、その行基さんが通りかかつてね、(…鯖をほし

がる行基を馬子が罵り、馬が倒れる…) それでね、ああ、これは四国にお大師さんがおるでしよ。ああ、お大師さん今のお大師さんであつたと思つてね、この例でも行基をお大師さんと言っている。

#### 【事例C】⑤

ほだら、お大師さんに会つて、お大師さんが、

「鯖くれ」

言うのにやらなんだんや。ほしたら、

「鯖瀬坂中鯖一つ行基にくれて馬の腹痛む」

行基菩薩が言うたら、腹が病んだんだな。

#### 【事例D】⑥

「鯖瀬下つて八坂坂中鯖一つ」とこう言うたん。

「行基大師にくれいで馬の腹痛む」

とこう言うんやと。(…行基が腹止の呪歌を詠む…) 今度ぶりお礼言お、と思てな、後へふり返つたら、もうほの形がなかつた、と言うん。ほれで。お大師弘法大師さんやつた言うんで、あそこへ銅像こしらえて、その人がな。

事例C、Dともに僧名はお大師さんであるが、歌は行基である。

ギョウキ  
ダイシ  
行基と大師は音数が同じである。行基でも、大師でも音のリズム崩れない。しかし弘法大師が主人公と語る話でも、歌では行基である。文献と同じく、元は行基が主人公の伝説であり、鯖大師の「大師」という名称に引かれて「行基というお大師さん」と語つたのではないだろうか。

⑦と⑧は行基の話である。

【事例E】⑧

昔行基菩薩がとにかく四国巡業に來られまして、それで、その道中でその鯖瀬に向こうです。とにかくその出くわしたんが、とにかく鯖を馬に追わせて、どうこうしておったんですな。それでその行基菩薩は坊さんのような、ありや何ていうたらええかな、羅漢さんのようなかつこしておりましたもんじゃから、(…行基が魚をほしがる…)

その時の歌いうんが、馬の腹が痛なった時には、

「大坂や 八坂坂中鯖一つ 行基にくれて馬の腹痛む」

⑦と⑧では僧名、歌の中の僧名共に行基である。⑦では「乞食坊主」、⑧では「四国巡業」と行基を遊行僧として語っている。

行基が主人公の場合は、寺の説明はされない。しかし弘法大師の場合は寺の由来である。

【事例F】⑨

四国八十八ヶ所の番外札所で海南町の鯖瀬に鯖大師というお寺がありますが、その由来についてお話を申し上げます。ええ、弘法大師さんが四国をお回りになっておる時に、鯖瀬に來た時に、馬にたくさん鯖をつけて通りかかった馬子に出会ったのであります。

と語りの最初で寺の由来であることを伝えている。行基から夢告を受けたことは語らないが、「お大師さんが、水をくれた」と加持水を飲ませたこと、「そこへ行基庵という小さい庵を建てて」

と行基庵と呼ばれていたことを語るなど、寺の縁起に近い語りになっている。

【事例G】⑩

あその鯖大師というお大師さんを祀って、それが今だに、鯖大師いうて、東京や大阪、北海道、九州からずうっと札所以外やけんど参りに來とるでしょう。ほの、ほういう由来があるやさかいに。

このように、鯖大師が弘法大師だと語る話者の意識では、鯖大師伝説は寺の由来だと思われていることがわかる。

## 五 結びにかえて

鯖大師伝説は江戸時代では行基の伝説であり、行基庵と呼ばれる。明治になり、四国霊場の番外札所に組み込まれるうちに、弘法大師伝説の一つに包括されていった。変容した年代は、文献上だと明治四十年代以降だが、鯖大師像が四国から勧請された年代は文献よりも早く、明治二五年〜四十年代にかけてと思われる。鯖大師信仰については稿を改めて論じたいが、四国遍路や弘法大師信仰の影響が強く見られる。

しかし海南町での明治生まれの話者の語りでは、行基と弘法大師が並列して語られている。在地の人々の意識では、鯖大師は行基であるという意識が根強かったと思われる。僧名をお大師としている場合でも、歌は行基である。

行基と大師は音数が同じであり、変化しやすい。また鯖大師伝説での行基は、弘法大師と同じく、巡礼する僧のイメージを持っている。行基の生誕地である大阪府では、行基伝説は水に関する伝説が多い。しかし、行基が訪れたとは思われない地域では、行基は修行僧として各地を訪れ、造仏や寺を建立したという伝承が残されている。「弘法清水」や「食わず芋」のように、弘法大師が全国を行脚したという伝説として各地に伝わっているのと同じである。行基と弘法大師は共通項が多いため、行基から弘法大師へと変容しても違和感がなく、在地の人々に受け入れられたのではないだろうか。

#### 付記

表四「鯖大師安置寺院一覧」出典の「鯖大師だより」は鯖大師本坊が発行している冊子である。住職の柳本明善師には資料提供などでご協力いただいた。愛知県図書館、静岡県立中央図書館、徳島県立図書館、香川県立図書館には文献調査でご協力いただいた。伏して感謝いたします。

#### 表一の出典

- A 坂本正夫編『猿の生肝』一九七六 桜楓社  
 B 宮岡洋子「円岡邦枝嬢の語る昔話」鳥取中山町の昔話(一)『伝承文学研究』第二二号 一九七九  
 C 広島県師範学校編『芸備の昔話』一九七九 歴史図書社

- D 及川大溪『芸備の伝承』一九七三 国書刊行会。なお同話が、広島県小学校図書館協議会編『広島島の伝説』(一九七八 日本標準)にも記載されている  
 E 川島秀一「弘法」という名の六部について『ザシキワラシの見えるとき』三弥井書店 一九九九。(初出『東北民俗』第二五輯 一九九一)  
 F 能田多代子『手つきり姉さま』一九五八 未来社  
 G 佐々木達司編『津軽の民話』(『聴く語る創る』第二号) 一九九四

#### 注

- (1) 柳田国男「鯖大師」『昔話覚書』一九四三。『柳田国男全集』八卷 一九九〇 筑摩書房より引用  
 (2) 阪口保「鯖大師由来記」『神戸山手女子短期大学紀要』第二集 一九五七  
 (3) 五来重「平方山姥と鯖大師」『鬼むかし』一九八四 角川書店  
 (4) 花部英雄「鯖大師と呪歌」『呪歌と説話』一九九八 三弥井書店。(初出「鯖大師と馬の腹痛む歌」『芸能文化史』十六号 一九九八)  
 (5) 鈴木棠三「行基の寺」『説話民謡考』一九八七 三二書房  
 (6) 米山孝子「行基説話伝承考―行基伝承から空海伝承へ―」『大正大学研究紀要』第九十号 二〇〇五

- (7) 柳田国男『分類食物習俗語彙』一九七四 角川書店
- (8) 注(4)と同じ
- (9) 徳島県海部郡海南町史編集委員会編『海南町史』一九六六
- (10) 宮崎忍勝『密教と現代』一九七二 高野山出版社
- (11) 白木俊幸『巡礼・参拝用語辞典』一九九四 朱鷺書房
- (12) 鷲尾順敬編『国文東方仏教叢書』第七巻紀行部 一九二五  
国文東方仏教叢書刊行会
- (13) 近藤喜博編『四国霊場記集 別冊』一九七四 勉誠社
- (14) 秋澤繁ら編『土佐國群書類従』第八巻 地理部 二〇〇六  
高知県立図書館
- (15) 海部郡誌刊行会編『徳島県海部郡誌』一九二七
- (16) 久保武雄『四国遍礼名所図会』一九七二
- (17) 松原秀明編『日本名所風俗図会』十四・四国の巻  
一九八一 角川書店
- (18) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第一期三  
一九七五 吉川弘文館
- (19) 佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』二〇〇六 人文書院
- (20) 繁田空山『四国霊験記図会』国会図書館蔵
- (21) 重野雄五郎編『四国八十八ヶ所道中独案内』国会図書館蔵
- (22) 住田実妙編『四国霊場記』国会図書館蔵
- (23) 森正人『四国遍路の近現代』二〇〇五 創元社
- (24) 知久泰盛『四国八十八ヶ所霊場案内記』国会図書館蔵
- (25) 此村庄助編『四国霊場八十八ヶ所遍路独案内』国会図書館蔵
- (26) 蔵  
四国道人『四国霊場案内 附 弘法大師御伝記』国会図書館蔵
- (27) 南知多町誌編さん委員会編『南知多町誌 本文編』  
一九九一
- (28) 亀崎第二尋常高等小学校『亀崎町郷土史料』(抄) 三月  
二十一日条。(半田市誌編さん委員会編『半田市誌 地区  
誌篇 亀崎地区』一九九七)
- (29) 二〇〇五年十一月十三日聞書
- (30) 吞海院での調査の際にいただいた
- (31) 『半田のお寺』一九八二 半田市仏教会
- (32) 半田市誌編さん委員会編『半田市誌 宗教篇』一九九五
- (33) 注(6)と同じ
- (せきね・あやこ) 昔話伝説研究会

表三 徳島県の鯖大師伝説と縁起（徳島県海部郡海南町は海南町と省略）

【伝説】

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
海南町 伊勢田下	海南町 伊勢田上	海南町 浅川東	海南町 栗ノ浦	海南町 若松	海南町 新宮	海南町 大田	海南町 大山	海南町	海南町	伝承地	
⑧M35年生	⑧M41年生	⑧M24年生	⑧M34年生	⑧M28年生	⑧M32年生	⑧M36年生	不明	⑨S6年	⑩T2年	話者・出版	
弘法大師・ 汚い行脚のお坊 さん	弘法大師	行基	行基・乞食坊主	弘法大師・ おじゅっさん	大師・行基	行基・大師	行基という大師	旅僧・弘法大師	行基	僧名	
×	(念仏)	行基	行基	行基大師	行基	行基	行基	(經文)	行基	歌の僧名	
○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	放生	
×	馬引き坂	×	×	×	×	×	鯖瀬	×	鯖瀬	地名由来	
鯖大師	行基庵・ 鯖大師	×	×	鯖大師像	×	×	×	鯖大師	行基庵	寺名	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	夢告	
×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	加持水	
鯖を焼く				松			鯖大師の 大きな松			その他	
		大谷女子大学説話文学研究会『徳島 県海部郡海南町 浅川・川東世間話 集』一九七三			立命館大学説話文学研究会『徳島県海 部郡海南町 川上昔話集』一九七三		立命館大学説話文学研究会『徳島県海 部郡海南町 川上昔話集』一九七三		横山春茂『阿波伝説集』一九三二		出典

【縁起】

19	18	17	
9年か ④H5年～H	④S46年	④S9年	調査・出版年
弘法大師	弘法大師	弘法大師	僧名
大師	×	×	歌
○	○	○	放生
○	○	×	夢告
○	○	○	加持水
・鯖瀬 ・馬ひき坂	×	×	地名由来
鯖大師本坊	鯖大師	八坂山鯖生大師	寺名
行基お手植の松	鯖大師本坊前住職の語り	行基開基	
冊子 『鯖大師本坊』寺が配っている	四国女子短期大学『阿波の民話を求めて』一九七一	尾関行應『四国霊場巡拝日誌』一九三六	出典

16	15	14	13	12	11
海南町	海南町	前田 海南町	海南町 中小路	海南町 浅川西	海南町 大田
④H14年	④S47年	④M28年生	④M34年生	④M34年生	④M36年生
弘法大師	弘法大師	弘法大師	弘法大師	弘法大師	大師・遍路
大師	大師	大師	大師	×	×
○	○	×	×	○	×
馬曳き坂	×	×	×	×	×
鯖瀬の大 師堂	八坂山鯖 瀬大師堂	×	鯖大師	馬子出家	鯖大師
×	○	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×
松 お手植の	写真あり	図と像の		弘法大師 の宿った 松の木	
海南町夢と活気あふれる地域づくり 促進協議会『海南町の民話』二〇〇二	武田明『四国路の伝説』一九七二	同右			



表四 鯖大師安置寺院一覧

A 漁業従事者

	寺院名	所在地	宗派	像	祀られた年代	大師信仰	出典
1	東学寺	千葉県浦安市	真言宗	石像	昭和2年	○	聞き書き。行徳歴史探検隊 HP
2	清源院	静岡県浜名郡新居町	曹洞宗	石像	不明	○	『新居町史』1985
3	神宮寺	静岡県浜名郡新居町	臨済宗	石像	不明	○	神宮寺 HP
4	網元の持ち回り	静岡県沼津市		石像	大正6年頃		沼津市歴史民俗資料館・パンフレット
5	歓喜寺	愛知県豊橋市	曹洞宗	石像	不明	○	聞き書き。『ふるさと豊橋』1979
6	徳城寺	愛知県豊川市	曹洞宗	石像	不明	○	聞き書き
7	地藏寺	愛知県岡崎市		石像	明治後期	○	『岡崎の石仏』1979
8	南蔵院	福岡県糟屋郡篠栗町	高野山真言宗別格本山	石像	昭和48年	○	鯖大師だより

B 新四国霊場

	寺院名	所在地	宗派	像	年代	出典
9	妙音院	千葉県館山市	真言宗	石像	不明。新四国霊場は明治28年	妙音院・縁起立て看板
10	鳳来寺 岩本院跡	愛知県南設楽郡鳳来町		石像	昭和3年	『鳳来町史』1981
11	大字黒坂	愛知県東加茂郡下山村(現豊田市)		石像	不明	『下山村史』1987
12	金剛寺	愛知県半田市	曹洞宗		明治25年か。(大正10年建立の石碑)	『半田のお寺』1982。長山寺の住職からの聞き書き
13	呑海院	愛知県知多郡南知多町日間賀島	曹洞宗	木像彩色	明治後半	『南知多町史』1991。聞き書き
14	長山寺	愛知県知多郡南知多町	曹洞宗	木像彩色	明治44年3月建立の石柱	『南知多町史』1991。聞き書き
15	太子堂	岡山県笠岡市		石像	昭和6年	鯖大師だより
16	土生町	広島県因島市		石像	大正10年	鯖大師だより

C 高野山・弘法大師

	寺院名	所在地	宗派	像	年代	出典
17	善福寺	千葉県浦安市	真言宗	石像	昭和41年	鯖大師だより
18	密峰寺	愛知県岡崎市	真言宗		不明	行徳歴史探検隊 HP
19	釈迦院	大阪府大阪市	高野山真言宗別格本山	石像	大正13年	縁起。鯖大師だより
20	坂上寺	兵庫県明石市	真言宗	石像	昭和9年	鯖大師だより。聞き書き

#### D 四国遍路

	寺院名	所在地	宗派	像	年代	出典
21	観音寺	北海道苫小牧市			昭和40年	鯖大師だより
22	興照寺	埼玉県川口市	真言宗	石像	昭和9年	鯖大師だより
23	金乗院	東京都練馬区	真言宗	石像	明治42年	鯖大師だより
24	竹林サチエ	滋賀県坂田郡米原町			昭和30年	鯖大師だより
25	愛宕山大師教会	岡山県浅口郡鴨方町			昭和51年	鯖大師だより
26	鯖大師教会(能満寺)	長崎県壱岐郡勝本町			昭和24年	鯖大師だより

#### E 個人祈願

	寺院名	所在地	宗派	像	年代	大師信仰	出典
27	円福寺	千葉県我孫子市	真言宗	木像彩色	明治42年		『孫子市史』1990。聞き書き。
28	勝呂ヨネさん宅(現在は安楽寺)	静岡県伊豆市土肥		石像	昭和10年頃	○	聞き書き。山口最子「民間伝承」1941
29	崇福寺	静岡県静岡市	臨済宗	石像	大正頃		鯖大師だより。『江南市史』1983
30	宝蔵寺	愛知県知立市		石像	大正4年頃		『知立の石仏を尋ねて』1993
31	秋葉寺	愛知県江南市		石像	昭和4年		『江南市史』1983
32	竜泉寺	愛知県江南市		石像	昭和10年頃		『江南市史』1983
33	弘法山	愛知県豊田市		銅像	大正の初め頃	○	『ぶらてくガイド わがまち紹介編3』1998
34	共同墓地	愛知県幡豆郡幡豆町		石像	不明	○	『幡豆の石像物』2005

#### F 不明

	寺名	所在地	宗派	像	祀られた年代	大師信仰	出典
35	大東町大池まわり	愛知県安城市		石像	昭和10年		『安城の石仏』1981
36	林性寺	三重県久居市	天台宗	石像	不明		鯖大師だより
37	須磨寺	兵庫県神戸市	真言宗	石像	不明		阪口保「鯖大師由来記」1957。『伝説の須磨』2004
38	百代寺	兵庫県加西市	真言宗	石像	不明	○	聞き書き